

2023 年

オーストリア・ウィーン市フロリズドルフ区
青少年ホームステイ派遣報告書



派遣団員

河添 莉緒 (かわぞえ りお)

相川 美咲 (あいかわ みさき)

愼 晏奈 (しん あんな)

藤井 一慶 (ふじい かずよし)

宮道 彩花 (みやじ あやか)

2023 年オーストリア・ウィーン市フロリズドルフ区

青少年ホームステイ派遣報告書

<目次>

1. ウィーン市フロリズドルフ区について
2. 募集要項
3. 選考スケジュール
4. 研修概要
5. ホームステイ派遣日程
6. 団員及び受入ホストファミリー
7. 派遣団員ホームステイ報告

1. ウィーン市フロリズドルフ区について

ヨーロッパの中央に位置するオーストリア。首都ウィーン市はかつて 640 年に及ぶハプスブルク帝国の帝都として、華麗な文化が華ひらきました。葛飾区は、この音楽の都、宮廷文化と歴史の町ウィーン市フロリズドルフ区と 1987 年 11 月に友好都市提携を締結し、36 年間に渡りさまざまな交流を行っています。なかでも、夏休み期間中に行われる 2 週間の青少年ホームステイ交流は、滞在を通して街の魅力を肌で感じることができ、ウィーンを「馴染みのある街」に変えてくれます。

青少年ホームステイ交流は、ウィーン市フロリズドルフ区への派遣とウィーン市フロリズドルフ区からの受入を毎年交互に行っています。派遣の年である今年（2023 年）は、7 月 27 日から 8 月 10 日までの 15 日間、5 人の青少年が葛飾区からフロリズドルフ区を訪れました。新型コロナウイルス感染症の影響により、今回 4 年ぶりの交流再開となりました。

ウィーン市は 23 の行政区より構成されています。第 21 区であるフロリズドルフ区は、ドナウ川をはさんで旧市街の対岸に位置し、面積は約 44 km²と葛飾区よりやや広く、およそ 15 万人が暮らす、ウィーン市で 3 番目に人口の多い区です。住宅地や大学、近代的な産業施設があり、丘陵地はワインのための葡萄畑が続いています。ドナウ川沿いの中州や湿地はきれいに整備され、天気の良い日は人々で賑わいます。

5 人は、ホームステイ滞在を通してホストファミリーから温かい歓迎を受け、文化や習慣の違いを楽しみ、さまざまな経験をしてきたことが、帰国後の報告からうかがえました。ここで紹介するのは、5 人の派遣団員がそれぞれに過ごしたウィーンで見たこと、感じたことの感想と報告です。

参加した派遣団員の国際交流は始まったばかりです。これから地域や学校などでこの経験を活かして活躍してくれることを期待しています。

2. 募集要項

事業名	オーストリア・ウィーン市フロリズドルフ区 青少年ホームステイ派遣		
派遣期間	令和5年7月27日(木)～8月10日(木) 15日間		
募集人数	5名		
対象	平成13年4月2日～平成20年4月1日生まれの方		
応募資格	① 申し込み時から派遣時を通して葛飾区に住所を有している方。 ② 国際交流に関心があり、派遣の目的を理解し、派遣後も区内で実施する国際交流事業に協力できる方。 ③ 健康で、海外生活やホームステイに対応ができ、区の研修、交流事業に参加できる方。 ④ 学校長、勤務先の理解が得られる方。未成年者は保護者の同意が得られる方。 ⑤ 事前・事後研修、報告会の全日程に参加できる方。 ⑥ 英語またはドイツ語で基本的なコミュニケーションがとれ、交流に意欲がある方。 ⑦ 過去に本事業で派遣されたことがない方。 ⑧ 新型コロナワクチン3回目接種済みの方、又は出発までに接種できる方		
言語	英語またはドイツ語	個人負担金	190,000円

3. 選考スケジュール

4月6日(木)	応募受付開始
5月9日(火)	応募締切 <必着>
5月中旬	書類選考結果と面接選考時間を郵送にて通知
5月21日(日)	面接選考
5月下旬	団員の内定。審査結果は全員に郵送にて通知。 ※派遣団員内定者のうち、事前研修の全日程を修了した方を団員として決定。

4. 研修概要

	日にち	研修内容
第1回	6月18日(日)	渡航手続きの説明、自己紹介、前回派遣団員の体験談
第2回	7月2日(日)	ウィーンの歴史・文化、ドイツ語講座
第3回	7月16日(日)	ホームステイ情報、現地での文化交流について
第4回	8月30日(水)	区長に帰国報告(葛飾区役所)等
報告会	11月19日(日)	かつしか国際交流まつりにて発表

5. ホームステイ派遣日程

7月27日(木)	成田発 ウィーン着、ホストファミリー対面式
7月28日(金)	【公式行事】国会議事堂、美術史美術館
7月29日(土)	ホームステイ
7月30日(日)	ホームステイ
7月31日(月)	【公式行事】ウィーン市庁舎、ドナウ川クルージング
8月1日(火)	【公式行事】Hop on Hop off バスツアー、ドナウタワー
8月2日(水)	【公式行事】ドナウ川でボート体験
8月3日(木)	【公式行事】シェーンブルン宮殿、シェーンブルン動物園
8月4日(金)	【公式行事】ドナウ低湿地国立公園
8月5日(土)	ホームステイ
8月6日(日)	ホームステイ
8月7日(月)	【公式行事】 フロリズドルフ区長表敬訪問、友好都市紋章花壇、かつしかシュトラッセ、寅さん公園見学、フロリズドルフ区のための1000羽鶴プロジェクト参加、フロリズドルフ中央消防署見学、交流会「日本文化の紹介」、フェアウェルパーティー
8月8日(火)	【公式行事】旧市街散策、プラーター公園
8月9日(水)	ウィーン発 (機内泊)
8月10日(木)	成田着

6. 団員及び受入ホストファミリー

団 員	ホストファミリー
河添 莉緒(団長)	Refenner レフェアナー家
相川 美咲	Cil, Lannner チル、ランナー家
愼 晏奈	Cil, Lannner チル、ランナー家
藤井 一慶	Bahr バー家
宮道 彩花	Mazanik マツァニック家

7. 派遣団員ホームステイ報告

2 週間の派遣を通して

河添莉緒

(1) はじめに

私は高校時代、世界史が一番好きな教科でした。特に中世ヨーロッパの宮廷文化などに興味があり、多くの神聖ローマ皇帝を輩出し強大な統治力を持っていたハプスブルク家について、現地で学べる機会をいただけたのは自分にとってとても大きかったです。

また、幼いころから音楽が大好きで、様々なジャンルの音楽を嗜んできました。中学時代の音楽の先生の影響で、オーケストラ等に触れる機会も多かったので、“音楽の都”と名高く、多くの音楽家と縁深いウィーンはすべてが魅力的でした。

大学3年生の夏という時期にウィーンで過ごした2週間は、とても濃く充実した期間でした。生活の中で歴史・文化・自然・街並み・人々に触れながら沢山のことを吸収してきました。ここで少しでも多くの気づきを書き記せたらと思います。



▶オーストリア帝国の王冠 @宝物庫

(2) 公式行事

公式行事では、シェーンブルン宮殿や国会議事堂などの歴史的建造物を訪れるだけでなく、ドナウ川をクルージングしたり、国立公園をハイキングしたりと多くの自然に触れる機会もあり、色々な角度からウィーンを見ることができました。

私が今回の訪問で一番楽しみにしていた場所は、ハプスブルク家の夏の離宮として使用されたシェーンブルン宮殿でした。実際にプログラムの終了後も一番衝撃が大きかった場所として記憶に残っています。

この場所はバロック様式とロココ様式の2つの建築様式が用いられており、オーディオガイドを聞きながら当時の宮殿の様子を知ることができます。

実際に邸を回りながらまず衝撃を受けたことは、部屋と部屋を繋ぐ廊下が一切なく、すべての部屋が扉で行き来できるように繋がっていたことです。後から調べて分かった事なのですが、当時はプライベートの概念がなく、皇帝の寝室や執務室などを沢山の人が移動の為に出入りしていたそうです。

残念ながら建物内は写真撮影が禁止だったので、中の様子を写真として残すことはできなかったのですが、その分じっくり目に焼き付けることができたので、当時使用されていた寝具やカトラリーなどが、今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

公式行事の中で国会議事堂と市庁舎を訪れた際に、オーストリアの政治面でも発見がありました。

日本では、国会中継を通して公に会議の様子を公開していますが、オーストリアの国会議事堂では、実際に会議場の中で会議を見学することができます。また、市庁舎も市民に開放されていて、他国の要人との対面で使用するような会議場がディスコとして使用されることがあるそうです。厳格な雰囲気のある部屋にDJが来ると聞いたときは、大変驚きました。そのほかにも、市庁舎の前の広場は、夏にはフィルムフェスティバルの会場として、冬にはスケート場になったりクリスマスマーケットが開かれたりと、市民に身近な場所として提供されているところがとても印象的でした。



▶市庁舎の会議室



▶国会議事堂

(3) カルチャーショック

現地に滞在する中で、私が印象的だったことについてご紹介します。

①信号機

市内を散策していると信号機から、時計の秒針のような“カチッカチッ”という音が早くなったり遅くなったりしながら鳴っていることに気づきました。理由を聞いてみると、これは目の見えない人のためのものだそうです。音がゆっくりの時は”止まれ”音が早いときは“進め”という意味なんだそう。日本には、こういった視覚障がい者の方々の為に音が鳴る信号機が設置されていますが、私が普段生活している中ではあまり見かける機会がありません。また、あったとしてもボタンを押す必要がある物が多く、ウィーンで見かけた信号機が当たり前に存在するという事実を知って、信号機一つとってもバリアフリーの面で見習うべき点があると強く感じました。

②英語

オーストリアの英語教育は日本と同じくらいの時期に始まるそうです。私には同い年のホストシスターがいたので、彼女の友達と遊ぶことも多くありました。その際、積極的に英語で話しかけてくれたり、私が分かるようにと、彼ら同士の会話も英語で会話してくれたことにとても驚きました。もちろん、日本語の方が英語との間に発音や文法、文字のギャップがある為、習得難易度が違うので、スタートラインが全く同じではないですが、同じ時期から同じ言語を学習しているはずなのに、私は友人や家族と自然と英語で会話することはできないので、悔しさを感じました。

③日本文化の浸透

私たちが日本から来たことを告げると「日本に行ってみたい」「日本が好き」と言っただけの方がとても多かった印象です。日本のアニメやマンガを好きな人がとても多いようで、本屋さんに行った際に日本でもあまりメジャーではないジャンルのマンガまでドイツ語訳されて販売していることに驚きました。また、和食も思いのほか身近な存在のようで、街のいたる場所にアジアレストランがありました。彼らは、そこで食事をする際に箸の使い方を教わることもできるようで、ホストファミリーにうどんを振る舞った際に、彼らが箸で食事にチャレンジしてくれた事がとてもうれしかったです。自分たちの国から遠く離れた場所で、日本文化が受け入れられ、それをきっかけに日本に興味を持ってきている事実がとても誇らしかったですし、会話のきっかけになることも多く、偉大さを再実感できました。

(4) さいごに

滞在中、私は少しでも疑問に思ったことを積極的に聞くようにしていました。そのたびに色々な人が沢山のことを教えてくれたのですが、一つ感じたことが、日本人と比べ、より自分たちの国に関心を持っているという事でした。現地の職員の方やホストマザーなど目上の方はもちろんですが、自分たちと同世代のホストシスターも政治や歴史、街にある物にどのような意味があるのか、多くのことを知っていてそれを教えられるという事が衝撃的でした。自分が逆の立場に立った時に、どれだけ多くの東京の、葛飾のことを教えられるかと考えたときに事前に調べておかなければ自信がないですし、普段何気なく享受している日常にもう少し興味を持ってみるべきだと自分を改めることができました。

1年後、ウィーンから派遣団員を迎え入れる際に、自分たちが経験した素晴らしい想いを、感動を、今度はウィーンの方々に感じてもらえるように、友好のバトンを繋いでいけるように貢献したいと強く思いました。

私たちが派遣団員として活動する為に、長い時間をかけて関わり準備して下さった葛飾区とフロリズドルフ区の皆さんにとっても感謝しています。この報告書を通して、この事業に少しでも興味を持っていただけるきっかけになれば幸いです。



右の表は、ホストファミリーとの過ごし方を簡単にまとめた行動表です。

それぞれが忙しい中で、土日だけでなく公式行事後も可能な限り楽しい時間を提供してくれました。

Ines

優しく、いつもニコニコの、我が家のお母さんです。料理がとても上手で、家庭菜園で育てた新鮮な野菜を使ったお料理はどれもおいしかったです。

私の好みに合わせて、色々な場所に行く計画を立ててくれたり、いつもできる限り希望を聞いてくれてとてもありがたかったです。

Maike

日本滞在経験のある、同い年の女の子です。

朝早くから仕事に出かけていて、毎日とても疲れているはずなのに、沢山遊んでくれてとてもありがたかったです。日本語で日本食を一緒に作ったり、ショッピングをしたりして沢山の時間を一緒に過ごしました。

Meine Familie



7月28日 (金)	夜景を見に行く
7月29日 (土)	ベルヴェデーレ宮殿の庭園散策 ドナウ川周辺で遊ぶ
7月30日 (日)	バーデンを散策
7月31日 (月)	フィルムフェスティバルに行く
8月1日 (火)	ホストシスターと日本食作り
8月2日 (水)	ダンスパフォーマンス見学
8月3日 (木)	ピクニック
8月4日 (金)	オーストリア料理作り 日本映画鑑賞
8月5日 (土)	宝物庫見学 シュテファン大聖堂見学 ショッピング
8月6日 (日)	ベルヴェデーレ宮殿内美術館見学 ハウスオブミュージック訪問 カプツィーナー納骨堂見学
8月7日 (月)	フェアウェルパーティ
8月8日 (火)	カイザーシュマーレンパーティー

(オーストリア風パンケーキ)

Judith

2 つ年上の頼れるお姉ちゃんです。

普段は、郊外で一人暮らしをしているのですが、仕事が休みの日は一緒に出掛けたり、のんびりおしゃべりしたりすることが多かったです。

日本のアニメや車が好きで、日本に遊びに来たいと言ってくれていました。

Danke Schön

ウィーンでの学び

相川 美咲

(1) はじめに

私はこのプログラムを知り、日本文化を紹介したい、外国を訪れて自分の視野を広げたい、という二つの理由から参加を志願しました。中学・高校の6年間、和太鼓部に所属していた私にとって、日本文化を海外の方に紹介する機会を持てることは、とても嬉しいことでした。特に、オーストリアに在住している日本人の数が少ないと聞いたことがあり、日本文化を紹介することで、現地の方により大きな感動をもたらすことができるのではないかと考えました。大学では英語を専攻し、外国の文化や歴史、さらには差別や貧困など世界で起こっている問題について学んでいます。言語を学ぶ際、世界中の出来事に触れる際、実際に他国に赴いて自分の目で見て肌で感じる事が大切だと感じていて、ウィーンという都市を訪れることを熱望していました。以下、私がウィーンで体験・発見したことをご紹介します。

(2) 体験

A : 芸術の地ウィーン

公式行事、ホームステイを通して、ウィーンの美術・建築・音楽・舞台といった芸術作品に触れることができました。世界史の資料集で目にしたことのある絵画や建築を実際に見たときの、迫力や美しさ、感動は言葉にできないほどのものでした。

私が特に心を動かされたものは、ホストファミリーに連れて行っていただいた、ダンスパフォーマンス（インプルススタンツ）です。移民をテーマにしたもので、ダンスというよりは全身の動きと表情でメッセージを伝える、非言語による劇のよう



【Impulstanz/インプルススタンツ】

なものでした。一本の縄と人間の動きによって表現されるパフォーマンスから、人々の関係性の変化を感じ取り、幻想的な演出も相まって不思議な気持ちになりました。終演後、他の観客につられて思わず立ち上がり、人生で初めてのスタンディングオベーションを経験しました。

B : オーストリアの食事

滞在中、オーストリアの伝統的な料理やスイーツをたくさんいただきました。オーストリアでは主食として、ポテトサラダやマッシュポテトなどの芋料理が、肉料理などのメインと一緒に提供されていました。最初は、その量の多さに圧倒されましたが、どれも美味しかったです。

ホストマザーが、“パラチンケン”（クレープの様なもの）と“カイザーシュマーレン”（パンケーキの様なもの）というスイーツを作って振る舞ってくれました。元の生地が甘い上に、砂糖をたっぷりかけたり、アプリコットやブルーベリーなどのジャムをかけたりして食べました。日本では、その場の全員分の食事が揃うまで、



食べ始めるのを待つことがあると思います。しかしこれらのスイーツは、出来立ての温かいままを食べられるよう、提供された人から食べるという、ある意味、マナーの様なものがあることを教えてもらいました。

他にも、シュニッツェル（ウィーン風カツレツ）やブラッドソーセージ（血のソーセージ）など、日本では食べることのできない伝統料理を味わうことができ、毎回の食事がとても楽しかったです。

【パラチンケン(左上)】【カイザーシュマーレン(右下)】

(3) 発見

A：街並み

ウィーンの街を歩くと、様々なものが日本と異なっていて、街並みの美しさに圧倒されるばかりでした。リングシュトラッセ（ウィーン市中心部にある環状道路）を歩いていると、高層な建物がほとんどないということに気がつきました。フロリズドルフ区の方が教えてくださいましたのは、この周辺では教会より高い建物を建ててはいけないという決まりがあるのだそうです。市庁舎は、基準値未満の高さで建てた後に、銅像などを設置することで厳密には教会より少し高くしている、という裏話も教えてくださいました。それでも、高層ビルが立ち並び入り組んだ東京の街並みと比較して、景観を重視したウィーンの街並みは、歴史を感じ、歩くだけで感動を味わうことができるものでした。



【ウィーン市庁舎】

また、歩道には数メートルおきにゴミ箱が設置されていました。日本ではコロナウイルスの感染拡大防止等のために、駅や公共の場所から撤去され、街中でゴミ箱を見かけることは少なくなりました。ホストシスターに聞くと、ウィーンではポイ捨てから街の景観を守るために設置している、と教えてくださいました。さらに驚いたことに、ソーラーパネルが付いているものもあり、太陽光によるエネルギーを使って中のゴミを圧縮し、ゴミ箱内のキャパシティを確保しているのだそうです。

私は実際に、ウィーンの街を歩き、また現地の方々からお話を伺う中で、オーストリアという国には、長い間守り抜かれてきた文化や歴史、景観の美しさを非常に重んじ、それらに対して高い意識を持っている人が多い、という印象を受けました。

B：現地の人々

① 人種

キリスト教徒が人口の半数を占めるオーストリアですが、街の至るところで、ベールを被ったイスラム系の女性を見かけたり、ホストファミリーが暮らすアパートの敷地では、住人の中にラテン系の方を見かけたりしました。人種の多様性や、多様性を受け入れる人々の意識を身近に感じることができました。

一方、同世代の女子学生との会話で、アジア人に関する話題になりました。ヨーロッパに住む人の中には、アジア人は皆、同一であると考え差別的な見方をする人が少数いると話していました。自国にいては知ることのできない、自分達が世界からどのように見えているのか、あるいは日本人の存在が珍しい場所での、マイノリティーとしての立場を感じることができ、貴重な体験でした。

② 性別

渡航前、オーストリアでは、他国と比較して男女平等の実現度が高いことを学びました。実際に現地では、女性が路面電車を運転し、男性が施設の受付をする光景を目にしました。性別と職業を結びつける、固定概念を感じるものがほとんどなく、オーストリアの男女平等社会を体感することができました。

華やかなイメージを持たれるウィーンですが、驚いたことに、貧富の差を目の当たりにすることもありました。駅の周辺には物乞いがいて、そのほとんどが女性であり、格差がないとは言いきれない状況でした。自分が知らなかった現実を目前にし、他の地域を訪れて現状を知ることの意義に気が付きました。同時に、貧困という国際社会全体の課題を改めて実感することとなりました。

(4) さいごに

私たちを本当の家族の様に温かく迎え入れ、たくさんの貴重な経験をさせてくださったホストファミリー、ウィーンの魅力が詰まったスケジュールを組み、準備をしてくださったフロリズドルフ区の職員の方々に非常によくしていただき、密度の濃い時間を過ごすことができました。そして、この素晴らしい経験をする機会をくださり、派遣に向け準備をしてくださった葛飾区の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。関わってくださった全ての皆様、ありがとうございました。

ウィーンで過ごした期間、素敵な方々と出会い、ウィーンの魅力を知ることができました。同時に日本および葛飾のことも知ってもらい、多文化理解や異文化への関心が増した様にも感じます。しかし収穫はそれだけにとどまらず、知見が刺激され、自分の目で世界を見ることの意義を再確認する、貴重な機会になりました。

今後、私たちがいただいた素晴らしい経験と、ウィーンの魅力を、自分なりの方法で伝えていきたいと思います。フロリズドルフ区と葛飾区の友好関係が続き、発展することを祈っております。

Introduction of My Host Family

私を温かく迎えてくださった、ホストファミリーをご紹介します。団員の一人である慎さんと同じお宅に、お世話になりました！



Eva (mom: エファ)

とても優しく、ツボにハマると涙が出るほど大爆笑をして、一緒にいるだけで幸せな気持ちになるお母さんです。作ってくれた伝統料理やスイーツはすごく美味しく、毎朝「おはよう」と日本語で挨拶をしてくれました。環境保全のため飛行機に乗ることを避けているそうですが、もし一度だけ飛行機で旅行することがあったら、絶対日本に行く決めていて、と言ってくれました。

Stephan (dad: シュテファン)

自他共に認める物知りで、外出先でウィキペディア片手に、その場所に関する情報を教えてくれました。ジョークが得意で、お手洗いのことを「皇帝でさえ1人で行く所」となぞなぞを出し、私たちを楽しませてくれました。私たちの朝食の準備を、エファと日替わりでしてくださり、誰にでも優しい紳士的なお父さんです。



左から2番目が私です。

Britta (sis: ブリッタ)

ウィーン郊外で暮らしていて、週末に、小旅行やホームパーティーをしました。ウィーンの魅力を教えてくれたり、公式行事はどうだった？と聞いてくれたり、時に真面目な話題で話し合ったりして、本当の姉妹の様な距離感で話せたことが嬉しかったです。最後に会った時、物を売るより人にあげる方が好き、と言って私たちにとっても綺麗な置物をプレゼントしてくれました。穏やかで優しい、素敵なシスターに出会えました。



ウィーンでの2週間

愼 晏奈

(1)はじめに

まずは私がこのプロジェクトにどういう思いで参加したかを述べて行きたいと思っています。私は高校生の時から国際関係に興味があり、現在大学でも国際系の学部に在籍しています。今まで英語に力を入れてきましたが、留学経験がなく、今回のウィーンでのホームステイが私にとって初めての海外滞在でした。そのため、この派遣での私の一番の目的は自分の英語力を試すことでした。私はこの派遣を通して自分の今の英語力を知り、さらに伸ばしたかったため、現地ではホストファミリーとはもちろんのこと、他の団員とも英語で話すようにしました。それに加えて私は高校生の時から生粋の世界史マニアだったため、自分が教科書を通して学んできたウィーンの歴史をこの目で見たいという思いが強くありました。

(2) 2週間英語に触れ続けた結果

結論から言うと、私は思っていたよりも自分の英語が通じてとても驚きました。出発以前、私の英語力はスムーズに会話ができる程度のレベルでした（正確に言うとIELTSのスコアで7.0、英検1級程度の英語力でした）。正直現地の人が何を言っているのかがわからないということはほとんどありませんでした。しかしやはり一番難しかったのは自分の意思や疑問を口に出して英語で言うことでした。常時頭を使っているので、1週間経ったあたりで脳に疲労を感じていましたが、滞在終盤では英語に触れ続ける生活に慣れてきていました。この二週間の結果、自分の英語力が試験の結果に現れるほど大きく伸びたということはありませんでした。しかし、英語を使い続ける生活に慣れたということが一番の収穫だったと思います。自分の英語が現地の人にも伝わるとわかり、自信につながりました。

(3)教科書を通して見てきた世界

私はオーストリアの歴史や芸術に関する予備知識を多く持っていた分、美術館や歴史的文化遺産を訪れるのがとても楽しかったです。右の写真は美術史美術館で見たブリューゲルの「農民の踊り」という作品です。私はこの作品を教科書で何度も目にしてきたので、この作品を目の当たりにした時、感動のあまり涙が出そうになりました。その他にも、クリムトの「接吻」や



シュテファン大聖堂などたくさんの文化遺産をこの目で見ることができました。自分が学んできた建築物や美術作品に出会うたびに、昔の人の技術とその文化遺産を現在まで保全してきた人々の努力に感動しました。世界史を勉強してきて本当に良かったと思いました。

(4) 食文化

オーストリア料理は、口に合わないものは一切なく、本当に全て美味しかったです。おそらくこの二週間で一番食べたオーストリア料理はシュニッツェルです。シュニッツェルとは衣の薄い平らなとんかつのようなものです。右の写真は中にハムとチーズが入ったシュニッツェルです。シュニッツェルには色々な種類があり、違いを楽しむことがで



きました。どの料理も本当に美味しかったのですが、私が一番気に入ったのはアイスです。アイスクリームというよりはジェラートに近いものでした。ウィーンにはアイススタンドが本当にたくさんあり、どの店舗もたくさんのフレーバーを揃えていたので、ウィーンでのアイス巡りがとても楽しかったです。

私は食べ物以外に注目したいオーストリアの食文化が2つあります。

1つ目は、ヴィーガン料理が本当に多いことです。オーストリアのほぼ全てのレストランがヴィーガン料理を提供していると、ホストファミリーが教えてくださいました。オーストリア、というより、ヨーロッパでは近年ヴィーガンが流行っているそうです。実際に、私たちは二週間の中でたくさんの人に会いましたが、その中でもヴィーガンの方は多かったです。彼らにヴィーガンになった理由を聞いたところ、環境への



配慮によるものでした。オーストリアの人々の環境保護への意識の高さ、そして人々の多様性を認めるレストランのあり方に感銘を受けました。

2つ目は、オーストリアの方々は食事中スマホを手にしていないことです。通りすがりにレストランを見ていると、ほとんどの人がただ食事と会話を楽しんでいます。日本では、友人や家族と食事をしているのにスマホを見ているという人がとても多い印象です。私はこのオーストリアの食事中のマナーがとても素敵だと思いました。

(5) さいごに

この2週間、本当にたくさんの方にお世話になりました。こんなにも素敵な機会をいただけたことを大変嬉しく思います。楽しかったのはもちろんですが、とても学びある2週間でした。実際に現地の文化を五感で楽しみ、向こうの方々と交流する中で、新たな発見がたくさんありました。滞在中様々な方々が私たちを温かく迎えてくださり、たくさんの恩恵を受けました。その恩返しとして、次は私が日本で海外、特にウィーンからの訪問者を温かく迎えたいと思いました。このように国を超えて受けた恩をバトンのように繋いでいくことが国際交流の発展に大きく繋がるのではないかと思います。これから先、国際交流を通してグローバルな視点を持った人が増えるように、尽力していきたいです。

葛飾区、フロリズドルフ区の職員の方々と、私たち派遣団員を迎えてくださったホストファミリーの方々をはじめとする、今回の派遣に関わった全ての方に心から感謝申し上げます。今後とも葛飾区とフロリズドルフ区の友好関係の継続とさらなる発展をお祈りしています。

My host Family

ご夫婦で二人暮らしのお宅に、同じ派遣団員の相川さんと共にお世話になりました。



Eva エファ

ホストマザーです。いつも笑顔で私たちに接してくださいました。日本を訪れたことがないのにも関わらず、日本語を個人的に勉強していたり、ドイツ語に翻訳された日本の文学作品を読んでいたりと、日本にとっても興味を持っていた方でした。お料理もとても上手で、パラチンケ（薄いクレープ状のパンケーキ）やフルーツサラダを作ってくださいました。

Stephan シュテファン

ホストファザーです。紳士的で、バンドでドラムを演奏している、とてもクールな方でした。ジョークが上手くてホストファザーとの会話がとても楽しかったです。とても博識な方で、街の中を歩いている時や夕食の時にオーストリアの歴史や食べ物をたくさん教えてくださいました。

Britta ブリッタ

ホストシスターです。平日はいませんでしたが、土日のお出かけには何度かついてきてくださいました。とても明るく、笑顔にあふれた方で、すぐに打ち解けることができました。最後に会った時には私たちにプレゼントをくださいました



2週間で見たウィーン

藤井 一慶

(1)はじめに

7月後半から8月前半にかけて私はオーストリアのウィーン市フロリズドルフ区に行ってきました。このホームステイプログラムに参加することになった動機は祖母の勧めでした。私は昔から海外留学や派遣に興味があり、郵便物として送られてきたこのプログラムの案内を見た祖母に勧められて応募することにしました。はじめはただ海外に行ければいいという単純な意欲しかありませんでした。しかし、応募用紙を書いているうちに自分は国際交流の一環として応募するのだという自覚が生まれ、真剣に臨まなければいけないという気持ちになりました。団員に無事選ばれましたが、新たな懸念点ができました。それはウィーンについていろいろ調べなければならないと思ったり、ホストファミリーとはどう接すればいいのかと不安になったり、考えることが多くできたことです。しかし、ここで自分の海外に対する意欲を思い出し、とにかく楽しめばいいじゃないかと考え始めるようになりました。こう考えてから出発の日が逆に待ち遠しくなり、一喜一憂していました。



国会議事堂前集合写真

(2) 体験・発見エピソード

① オーストリア航空



ウィーンでの体験となると少し違いますが、十分に良い体験だったので記します。長時間フライトということなので毛布やクッションが用意されているのはもちろんのことでしたが、映画に日本のものがあることや、ゲームやショッピングなどのエンタメ性のあるものが多く提供されていることに嬉しさも含んだ驚きがありました。また、機内食について尋

ねる時キャビンアテンダントは僕らを見てドイツ語から英語に変えて話しているのを聞き、サービス精神にも感動しました。今思えば当たり前のことだったのかもしれません。しかし、ちょっとしたことに感動するほど新しい体験だったということなのです。

② 建物

まずウィーンに着いてはじめてに見つけた日本との違いは建物でした。建築を勉強している自分だからこそ気づくことが多く、基礎やつくり、材質がかなり違うことを知りました。さらに気が付いたことがありました。私が民家やマンションだと思っていた建物は、スポーツ施設や何らかの店であったことが多く、外観だけでは何の建物か分からないところに面白さを感じました。特にウィーン市内には、そのような建物が多くありました。一方で、郊外にある住宅の見た目やつくりは、日本の住宅とかなり似ていると感じました。都市部と郊外の建物それぞれで、日本との相違点や共通点があり、私にとって刺激的な発見でした。



街中の建物

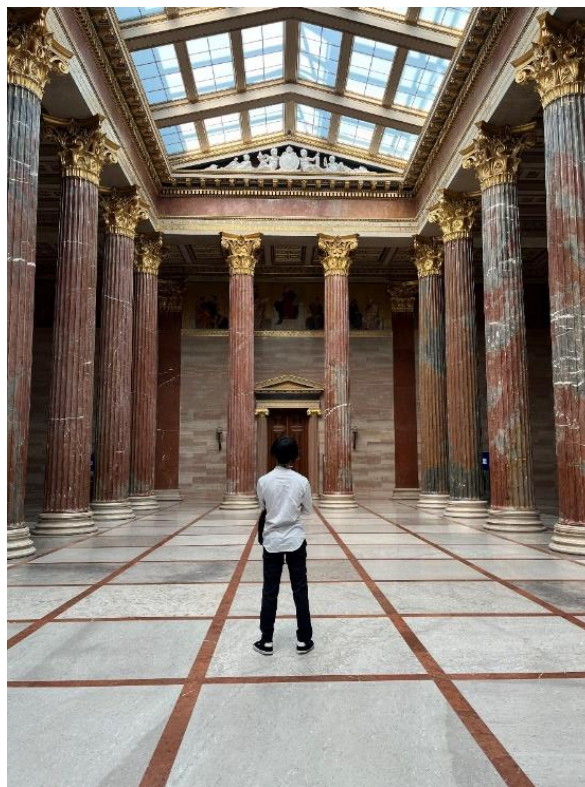
③ 食事

食事は、全体的に非常に美味しかったというのが感想です。しかも食べ盛りの自分にとってちょうど良い量であり、味、ボリュームともに素晴らしかったです。そして驚いたのは向こうの主食はパンや米でもなくジャガイモベースの料理であったことです。これがまた工夫されており、チーズを入れたり揚げものにしたりと、単純な料理にはさせないとばかりにバリエーションが豊富でした。また、ホストファミリーには、オーストリアの伝統料理もよく作ってもらいました。ウィーンを楽しんでくださいというメッセージが込められているように感じ、その心遣いをありがたく思いました。特に小麦を練って作ったすいとんのようなパスタにソースをつけて食べる料理が、自分にとってとても新鮮で美味しかったです。

(3) さいごに

このプログラムに参加していろいろなことを学びました。オーストリアの文化、外国語によるコミュニケーション、海外滞在の楽しみなど2週間とは思えないほど充実感があり、また楽しすぎてとても短く感じました。今回の派遣で明確に成長できたことが2つあります。1つは英語力です。スピーキングはおろかりスニングもまともにできなかった自分がホストファミリーと会話ができるようになり、日本に帰ってからその成長が日々の英語の勉強によく反映されていることが分かります。もう1つはコミュニケーション能力で、人と関わるのが得意ではなかった自分が積極的に現地のスタッフと会話をするようになり、ホストファミリーとの会話の頻度も日に日に多くなっていました。少し苦手を克服できたようでちょっとした達成感を感じました。こうした成長ができたのはプログラムを組んでくれたスタッフの尽力と、海外派遣として共に行動してくれた仲間のおかげです。

私はこれからたくさんの人と出会うでしょう。親しくなる人、定期的に会う人、はたまたその場限りの人もいるでしょう。そんな中でも大切なのはやはりとにかく話しかけること、会話をするのだと思います。2年後の派遣団員にも、国際交流ではとりあえず会話をしてみるのが大切であると伝えられたらいいなと思います。



国会議事堂

ホストファミリー紹介

☆Eva☆

頼れるホストマザーで英語も上手！私が怪我をした時に面倒をみてくれたり、私に分かるようウィーンのことや家のことを英語で説明してくれたり、とにかく面倒見が良く頼れる魅力的な女性でした。

☆Ernst☆

頼れるホストファザーで面白い！でも英語はちょっと苦手。それでも一生懸命私と会話をしてくれたり、遊びに連れて行ってくれたりとにかく楽しませてくれた心優しい男性。しゃべる機会は少なかったけど家族を支えているという感じがとても尊敬できました。

☆Anna☆

初日に家のルールを教えてくれた口達者なホストシスター。コミュニケーション能力が高く、ほかのメンバーのホストファミリーとよく会話をしていました。朝起きるのが少し苦手であうとしながら朝食を食べていたのがとても印象的でした。また、彼女の猫とのふれあい方はとてもやさしく可愛らしい一面もありました。

☆Benedikt☆

今回のホームステイプログラムで最もお世話になったといっても過言ではないとても頼れるホストブラザー。英語が上手だけでなくスポーツも得意で、ロッククライミングがとても上手でした。また頭もよく、2023年の10月から医科大学に進学するようです。来日経験があり寿司が好きなようで、もし日本に来たならば一緒に寿司を食べに行きたいです。

🐱Sayuri🐱

日本語ネームがつけられた飼い猫。
とにかくかわいい！



ホストファミリーとの集合写真

2 週間のウィーン体験記

宮道 彩花

(1) はじめに

私は2023年の7月27日から8月10日までの2週間、ウィーン市のフロリズドルフ区に青少年派遣団員として滞在させていただきました。

応募のきっかけは母の勧めで、語学力の向上が期待できることに加え、海外体験による視野の拡大や将来の選択肢を広げることもつながると考えたためです。小学生のころにアジア圏の国でのホームステイ経験はあったものの、ヨーロッパ圏、かつ一人でのホームステイ経験は今回が初めてでした。そのため、今回の派遣では2週間と思えないほどの、多くの新しい経験や気づきを得ることができました。ここでは語り切れないたくさんの思い出を持ち帰ってきましたが、次世代の方にあてていくつか、私の主観にはなりますがオーストリアでの気づきや実際のホームステイでの雰囲気などを現地でのエピソードを交えて拙文ながら書かせていただきます。



毎朝集合する区役所前。
美術館のように綺麗な建物

(2) 街並みと交通



ウィーンを中心街。左に見えるのが
シュテファン寺院

現地で一番初めに「異国」らしさを感じたのが、フロリズドルフ区の区役所前に着いた時でした。初日、ホストファミリーとの対面式を行うために、空港から車で区役所前まで送ってもらったのですが、あまりにも建物が綺麗だったため、そこが区役所であることに気づかず区役所を探して辺りを見渡してしまったことを覚えています。そこからウィーンで生活していくうちに、重要な建物だけでなく人々の家やスーパーマーケットなども日本に比べ景観を重視した手の込んだ造りになっていることに気づきました。

ウィーン、特に中心街にある建物は建築様式にこだわりのあるものが多く、「〇〇様式」という言葉をよく耳にしました。また教会が多く建てられていて、なかでもシュテファン寺院という街の中心部のとても大きな教会は圧巻でした。建物の建て方についても、教会より高い建物は建ててはいけない、というような決まりもあるようで、そういうものによってこの景観が保たれているのだそうです。お昼時の街も素敵でしたが、夜、日が落ちてからの街が私はとても好きでした。後ほど紹介します。

交通についてです。ウィーンでは、日本と比べて圧倒的に道路の幅が広く、車やバイクが行きかい多くの人であふれていました。歩道でも、スペースがあるため家族や友人同士で横並びになって歩くことができました。また交通手段として路面電車が主流であるということもウィーンでの気づきの一つです。家を出てすぐ、駅まで移動せずに電車に乗れる便利さは日本では味わえない貴重な体験でした。他にもスクーターの貸し出しサービスが盛んであったり、観光用として馬車が街の観光スポットをまわったりと、歩くだけで日本と全然違う景色を見ることができてとても良かったです。



観光用に使われる馬車。街では教会の鐘の音か馬のひづめの音が絶えず聞こえる

(3) ホームステイ生活

個人的に一番の嬉しい驚きは、私のホームステイ先の家に果物かごがいくつか置かれていたことです。海外が舞台の映画やドラマでよく見る果物かごが実際に使われているということを知り、感動しました。また現地の果物には、日本で聞き馴染みのないものも多く、毎日違う果物にチャレンジできたのもとてもいい思い出です。



夜のシュテファン寺院。
黒い空によく映える

暮らしについては、現地では日本ほど「お風呂に入る」という習慣が日常的なものになっていないのも印象的でした。お風呂場と洗面所が同じ個室につくられていたり、洗濯機をまわすのは週に2回程度だったり、というのを知って改めて日本との違いを感じました。ウィーンは日本と違って空気がとても乾燥しているうえに夏場でもとても涼しい気候であるため、汗を全然かきませんでした。土地の気候が人々の生活習慣に大きく関わっているのだということを実感しました。他に生活習慣について、寝るのが遅いというのも現地での新しい気づきです。日本よりも日が沈むのが遅いこともあって、17時や18時から外にでかけることも日常茶飯事でした。ウィーンではお店はほとんどが18時や19時には閉まってしまうのですが、レストラ

ンや映画館は深夜まで開いていることが多く、夜にケーキやアイスを食べたり映画を見たりして、家に帰るのが 24 時近くになることもよくありました。日本では 17 時には子供たちを家に帰らせる習慣があり、それをあたりまえに思って過ごしてきたので、ウィーンに着いたばかりのころは夜でも人が行きかっているのを見て驚いたことを覚えています。夜の街では、道の電灯が付き、荘厳な建物が夜の空によく映えました。レストランやバーが人でにぎわっていて、カップルが腕を組んでゆっくり街を散歩していたり、高校生くらいの子供たちがゲームセンターのようなところで遊んでいたりとしていました。

ホストファミリーとの会話についても記しておきます。

一番多かった会話は主にウィーンについてです。教会や路面電車のシステム、スクーターの貸し出しサービスなど、目についたものを端から説明してくれました。アイスクリーム一つをとっても、日本では聞いたことのない味の種類などが並んでいたため、日常の中でのたくさんの新しい発見はホストファミリーとの会話で教わりました。派遣で公式行事が終わった後などは私からその日何を食べたか、どこに行ったかなどを迎えの車の中で話しました。家での食事では主に日本について聞かれることが多くありました。難しい質問が多く、答えにつまるたびに「調べるからちょっと待って」とスマホで検索をかけていました。聞くことよりも話すことの方が難しいことを強く感じました。ここでホストファミリーとの会話の中で説明が難しかった質問をいくつか抜粋して紹介します。



ウィーン市街にたくさんあるアイスクリーム屋さんのひとつ。果実の味がこくてとてもおいしい。

「漢字をすべて書けるようになるにはどれくらいの時間がかかる？」

「日本では先生たちはどうやって生徒の成績をつけるの？」

「日本では宗教の授業がないの？」

などです。答えるのにとっても苦戦しましたが、話している中でそもそも日本について間違った認識をしていることが分かったりしてとても面白く楽しい時間を過ごせました。一番面白かった思い違いは「日本人はすべての料理を箸で食べている」というものです。ナイフやフォークをあまり使ったことがないと思われていたことがとても面白く印象に残っています。また一番感心したことは、お弁当や給食といった文化についての話になった時に、ホストシスターが「日本のアニメで見たことある！」と言っていたことです。アニメ文化が世界に浸透していくと同時に、海外の人が日本文化を知るきっかけにもなるのだということに気づきました。

最後にウィーンの人達についてです。一番違いを感じたのは、人と人との結びつきが日本よりも強いという点です。私のホームステイ先の家庭では、毎週日曜日は祖父母と食事を一緒にしたり、休暇がとれたら祖父母の家で数週間過ごしたりすると言っていました。私の家ではすぐ近くの県に住む祖父母に会うのが2, 3カ月に1度なのに対し、クロアチア人の祖父母（ウィーンにもクロアチアにも家がある。）とほぼ毎週顔を合わせている、ということに凄く驚きました。また、ホストシスターにはボーイフレンドがいるのですが、彼が毎日私たちの家に来て朝ご飯も夜ご飯も一緒にしていたことにも驚きました。日本では恋人の親と親しくなるのは結婚間近や幼馴染の場合が多いと思うので、国が違うところのような面に関して大きく違いがでるのだということを知ることができてすごく興味深く感じました。

(4) さいごに

ウィーンで過ごした2週間という日々は年単位で見るととても短い時間ではありますが、この派遣では今年経験したどんな出来事よりも色濃く、数えきれない思い出を作ることができました。私を暖かく迎え入れてくださったホストファミリーはもちろん、プランをたてて毎日交代で随行してくださった現地の方や、出発前から帰国後までサポートしてくださっている葛飾区の職員の方々など関わってくださったすべての方に心から感謝申し上げます。

日本ではできない体験を多く経験させていただいたこの2週間のフロリズドルフ区青少年派遣を終えて、視野が広がり、前より多角的な視点から物事を見ることができるようになったように感じます。この経験を自分だけの思い出にとどめず、次へとつなげていきたいです。これからも葛飾区とウィーン市フロリズドルフ区の友好関係が続くことを祈っています。

稚拙な文ではありましたが、ここまで読んでくださりありがとうございました。



区役所への送迎の時の車の窓からの風景

MY HOST FAMILY



2週間お世話になったファミリーの紹介をします。
私のホームステイ先はファザー、マザー、同い年のシスターの3人家族で、とても優しく明るい家庭でした！

左図は家族で街中のカフェに立ち寄った際に撮った写真で、左からマザー、ファザー、シスター、宮道です。

私のホストペアレンツはクロアチア出身だったため、家族全員がクロアチア語とドイツ語を話すことができました。加えて同い年のホストシスターの Iva とホストマザーの Martina は英語も堪能で、家族だけでの会話ではクロアチア語、親戚などがいる場ではドイツ語で繰り広げられる家族団らんの会話を、私のために都度英訳して伝えてくれました。ホストファザーの Bozo は英語が苦手だったため、私が彼と会話をする時は大抵マザーかシスターが間を取り持ってくれました。

Bozo (ホストファザー)

電気技師で朝がはやい。話すことが好き。重い荷物を持ってくれたり、車のドアをあけてくれたりする紳士。

Martina (ホストマザー)

フルート奏者で、学校でフルートの先生もしている。ギターや歌も上手で、昔 Bozo と一緒にバンドを組んでいた。毎朝私を区役所前まで車で送ってくれた。

Iva (ホストシスター)

17 歳で同い年。フルートが上手。日本のアニメが大好きで、私の知らないアニメも教えてくれた。とてもやさしくてかわいい。

